

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の一性格

内 田 芳 明

ローマ帝國あるいは古典古代世界の没落論は、早くも帝政初期のローマの古典的教養を擔う思想家や歴史家たちの間では、たとえ潜在的乃至消極的の形であったにせよ、迫り来る必然の運命的豫感の如きものとして感ぜられていたのであった。例えばセネカ(B. C. 4—A. D. 65)は既にローマの老衰を感じてその前途に滅亡を豫感したが、タキトウス(A. D. 55—118)は、若きゲルマン諸民族の抵抗し難い強力な蠢動の前に《今や帝國の運命の切迫する》のを感じ、帝國の存立のためにゲルマン諸民族の相互内訌の長からんことを願ったのである。⁽²⁾所がそれが始めて鋭い且つ明確な意識にまで齎らされたのは、周知の如く初期キリスト教神父達の護教論のあるいわ歴史哲學的著作に於てである。ここでは同時代の具體的環境

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の一性格

たるローマ帝國の世界に對する頗る實際的且つ實存的緊張が、偉大な精神的形成體を齎したのであった。その中でも吾々はやはり最高且つ最大の意義をもつものとしてアウグスチヌス(A. D. 354—430)の存在を想起する。⁽³⁾しかし一個の歴史的問題としてそれが考察の對象にせられるに至るのは漸くルネッサンス期に於てである。古典古代文化に對する種々の接近の仕方を示した多くの人文主義者たちのうち筆頭第一にマキヤベルリ(A. D. 1469—1527)を挙げねばならぬ。彼は祖國フィレンツェの國家再建への熱烈な且つ現實的な課題に應えんとする國家論的關心からではあるが、ローマ帝國の隆盛と衰退を一つの歴史的材料として、衰退する國家再建の方途に Vellei の理説を主張したのである。⁽⁴⁾然るに降って一八世紀に

なると、啓蒙主義時代の新しい歴史思维の豊穰な展開に
 應じて、この問題が正に本格的に一個の歴史的課題とし
 て取扱われ來つたのを見る。先づヴォルテール⁽⁵⁾ (1694—
 1778) モンテスキエ⁽⁶⁾ (1689—1755)、並びにギボン⁽⁷⁾ (1737
 —1794) と彼らの古典的著作とを人は直ちに念頭に浮か
 べるであろう。茲では人類の啓蒙や進歩の理念に導かれ
 つゝローマ帝國没落の原因論が知的關心を自ら自體として
 追求せられ、《宗教と蠻族が滅ぼした》(ギボン、ヴォル
 テール) という明確なシエマに達している。爾今この
 課題は繰返し種々の状況の下に種々の問題意識と方法と
 によって取扱われ來つて、既に一つの研究史を形作つて
 いる。⁽⁸⁾ これらの點を一寸顧みるだけでもこのテーマが如
 何に汲み盡し難い新鮮にして魅力に富んでいるか、又如
 何に個人の解決に餘る大問題であるか、ということが知
 られる。事實それはもろもろの文化現象が錯綜し交流し
 あるいわ相繼起しつゝ展開せられ行く所の、一個の巨大
 な《複合現象》であるが故に、コルネマンの言葉を借り
 て言えば、《今日古代史家に課せられた最も困難な問題、
 問題中の問題である》⁽⁹⁾ と言えるのである。と同時にこの

研究史は、直ちに西歐近代の學問史、ヨーロッパの人間
 の内面史、ヨーロッパ精神の自覺史、というような意味
 をも含んで來る性質のものであると思う。そのことはこ
 の研究史の考察に當る者に種々の取扱い方の可能性を與
 えるであらうし、ある程度それを必要とするであらう。
 というわけは、それら無数の古代世界没落論の出現はそ
 のまゝ直ちにその研究の方法や問題意識の、従つてその
 見解や結論の驚くべき多様な對立や相違を形成している
 から、その背景に存する精神的自覺や問題意識、その研
 究を導く方法や視角などを顧みることなしに、單にそれ
 らの研究成果を結論的に提示することは、唯混亂を招來
 せしむる外はないからである。しかし吾々はここではそ
 の研究史的回顧に立入ることは出来ない。僅かに二つの
 大戦の前後の最も優れた又最もスケールの大きい没落論
 を二、三取あげて、これらの多角的諸問題の一面を窺つ
 てみることにしたいと思う。先ず、前大戦の前後にマツ
 クス・ウェーバー⁽¹⁰⁾ (1864—1920) とミカエル・ロストフツ
 エフ⁽¹¹⁾ (1870—1952) を、今次大戦中とその後にエルンスト
 コルネイン⁽¹²⁾ (1868—1946) と現ベルリン大學教授フラン

ツ・アルトハイム⁽¹³⁾とを代表的に考察してみることにした
 と思う。このうちウエーバーは歴史學派經濟學者の流
 れから之れと對決しつゝ出て來た社會經濟史家⁽¹⁴⁾しかも同
 時に社會學者でもある所の巨大な存在であることは周知
 の所であるが、純然たる古典古代史家たる他の三人と比
 較すれば自ら對照を明かにする一面があり、やはり歴史
 派經濟學者の影響の跡を深く留めていることが示され
 くる。しかし他面、ウエーバーとロストフツエフとをコ
 ルネマンとアルトハイムとに比較してみると、これら
 二組のグループの間には、二つの大戦の間に横たわる問
 題意識や精神的歴史意識の重點の置き所や性格に於て巨
 大な⁽¹⁵⁾ずれが存するようと思われる。その差異は以下吾々
 の考察全體が漸次明かにしてゆくであらうけれども、今
 その顯著な一例について指摘するならば、ウエーバーや
 ロストフツエフにとっては、古代世界の諸々の文化領域
 のうち經濟生活への壓倒的關心が示され、それと關聯し
 て社會的階級的對立(ロストフツエフ)あるいは社會的
 階層形成(Soziale Schichtungウエーバー)が、要する
 に階級問題が主要構成要素乃至問題關心の一つとなつて

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の一性格

いるのに、之れに對してアルトハイムやコルネマンにつ
 いては、歴史的に政治的・國家的・軍事的問題、要する
 に政治の問題と、それに關聯して精神史・宗教史が深大
 の關心事となつてゐる點が注目せられると思う。もとよ
 りウエーバーに於ても精神史宗教史の問題は彼の學問體
 系のうちにある種の重大な要素をなしてはいる。然しな
 がら彼の比較宗教社會學論集を味讀した者には恐らく明
 白となるように、宗教史は經濟史に宗教は經濟に關聯せ
 しめられつゝ絶對に分離し得ぬ問題の構造を示してゐ
 るのである。⁽¹⁵⁾更に經濟史の内容についてみればウエーバー
 とロストフツエフは深刻な相違を示してくるし又同じく
 政治史・精神史の重視と言つてもコルネマンとアルトハ
 イムでは方法に於て全體の位置づけに於て基本動機に於
 て大きなずれが存している。しかし唯一つ共通の點は、
 彼らの古代没落論がそれぞれ現代意識の反映乃至所産で
 あるという事である。而もこの場合にも如何なる反映が
 みられるかに相違點がある。がそれについては一連の考
 察の後に明瞭にせられるであらう。茲では先ずロストフ
 ツエフを一瞥し、續いて之れとの比較を念頭に置きつつ

ウェーバーを取あげてみたいと思う。

第一次大戦に於けるヨーロッパ人にとって始めての徹底的な文明の破壊の経験は、彼ら知識人一般に頗る深刻且つ多方面的影響を與えたが、歴史學に於てもそれは種種の精神的反應を示した。誰しも先ずオスワルド・シュペングラールやアーノルド・トインビーのあの歴史への勇敢なる挑戦とも言うべき新しい歴史構想の出現を想起するのであるが、そのような思惟の優越した史論ではなしに、逞しい實證的研究操作を通じて自己を冷靜に客觀化するという努力の中で歴史の現實との必死な對決あるいは緊張が示されたのであった。吾々は、既に吾々に親しみあるものとせられたアルフォンス・ドップシュ、クリストファー・ドウソン、アンリ・ピレンス、フェルデナン・ローなどの名と共に、主として中世史家側からする、ヨーロッパの歴史的傳統への再吟味が行われ、ヨーロッパ文化の形成が古代文化との連續性に於て問題とせられたのを想起すると共に、他方では純然たる古典古代史家側からする直接間接古代文化の没落論に觸れた問題

への關心が高まっているのを知る。オットー・ゼイク、エルンスト・シュタイン、テニー・フランク、フェレロ、ヘトランド、ロストフツエフ、などの大研究が立現れる傍ら、多數の雜誌論文が目立ってくるのを知る。一方では形成されゆく「ヨーロッパ」との關聯で古代文化との連續性を取あげる中世史家と、他方では「古代」の没落乃至終焉を強調せんとする古代史家と一見興味深い對照的印象を與えるけれども、生々しい苦惱の歴史的體驗は、不安や戰慄、反省や批判、對決や緊張、期待や確信といった種々の旺盛な精神的反應を示して、このような危機の歴史意識が現代歴史學に於ける創造的な諸方の一源泉となつてゐるのを見ることが出来る。しかも之れらの數ある没落論中、ロストフツエフの「ローマ帝國社會經濟史」は拔群の輝かしい成果であることには誰しも異論がなからうと思う。アルトハイムがロストフツエフのそれを第一次大戦の生んだ没落論の代表であるかの如くに取扱うのも偶然ではない。

この著の主題とする所は、《初期ローマ帝國の社會的經濟的諸狀態の研究》と並んで《古代世界の歴史の中で

都市の演じた指導的役割が漸次抹殺されて行つた發展の敘述》とに存する (Roman Empire p. 454, Kaiserreich II S. 214)。かかる本書の目的は目次の中に明瞭に反映している。即ち帝政三百年の發展過程が辿られながら、特にフラビアン、アントニー兩朝治下の約一世紀の敘述が大半を占めており、且つ《都市と農村》が對比されている (四一八章)。又政治的にはこの時代は《啓蒙君主國》とせられ、やがて後續する軍事的君主制 (九章) 乃至軍事的無政府 (一〇、一一章) と對比せられ、そして最後の章に《オリエント的專制》なる歸結に於てローマ帝國の滅亡が直ちに古代文化の没落を意味するものとして提示されているに出遭う。かくして吾々は彼の没落論を次の三點に規定せねばならぬ。

第一、ロストフツエフにとって滅びゆく古代文化なるものは、ローマ帝國に於て (具體的には啓蒙君主制時代のそれに於て) 最後の花を咲かせたグレコ・ローマン的都市文化である。これはローマがヘレニズム世界を政治的に統一包括することによってつくりあげた世界 (所謂 *okoujstun*) の地盤でヘレニズム世界から受継いだもの

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の一性格

であつて、經濟的にはヘレニズム東方に於ける資本主義的經濟を、社會的にはギリシャの都市國家 (polis) を、ローマ帝國の基本組織の中に導入したのであつた。從つてロストフツエフはヘレニズム世界とローマ帝國の世界とを社會經濟史的觀點から單一乃至同質の世界とみなすわけである。このことはローマ側に即して言えば、アウグストウス以來、殊にヴェスパシアン以來啓蒙君主たちの一貫してとつたあの屬州都市化の基本政策が照應する (p. 90)。而もこの皇帝達の最大功績であるとせられる所の (p. 112) 都市化なるものは、既に古くから存在していた都市生活を強力に推進しつつ、強大な都市ブルジョアジーを全屬州に創造した (p. 90, 99)。かくして彼らは共和制時代以來の古いメンバーに代つて新しい元老院階級のメンバーを代表して帝國の政治的支配權をも掌握すると共に (p. 107) 帝國の市民軍を構成し (p. 103) —— ヴェスパシアン治世に於ける *Collegia iuvenum* の普及 ——、農業に於ても工業に於ても資本主義的經營を推進した。かくて都市及び都市ブルジョアジーは帝國の政治・軍事・經濟・文化一切の擔當者として主導的役割を

演じた。

第二、然しながら都市化は同時に帝國の滅亡をも運命づける所の深刻な社會的問題を孕んだ。それは帝國の全住民を對立する二階級に分化させた (p. 332 Kaiserreich II S. 91f)。一方には支配者たる特權のブルジョアジー——即ち資本主義的經營を營む地主、工業資本家、貿易商人からなる都市市民 (p. 30, Kaiserreich I S. 80)——が、他方では被抑壓階級たる勤勞大衆——農民、手仕事人、奴隸——が相對した。しかもこの後者特に農民は帝國の大多數住民部分を形造っており、消費者階級 (都市市民及び軍隊) のために生産し搾取せられる勞働者階級であり (p. 298)、政治的社會的には都市市民の權利を有しなから低く階級 (Peregrini) であった (p. 299)。かくしてロストフツエフにとって古代文化の没落とは、たとえ少數者の利益を代表するものであったにせよ (p. 179) 《教養ある階級の勝利》 (p. 115) を意味した帝政初期の都市文化が、この下層社會大衆によって破壊され滅亡してゆく過程に外ならなかったのである。

第三、初期帝政時代の工業資本主義にとっての著しい

特徴はその急速なる没落である (p. 162)。彼はこの原因を先ず差當り古代經濟一般の脆弱性に求め、社會的には《競争の缺乏と購買力の缺乏》に基くものとなし (p. 167f, 303f, Kaiserreich I S. 145f)、政治的にはローマ帝國の擴張政策と運命を共にしたと解した (p. 305)。しかしロストフツエフは没落の決定要因を更に根源的に求めて、第一に上述の都市化それ自體の生み出した社會的、反目を、第二にこれと關聯して衰退し始める經濟的危機に對應して行われた帝國官僚制の強化絶對化の政策を擧げる (p. 330ff, Kaiserreich II S. 89ff)。經濟的危機に對するこの逆手の道を選ばしめたものは皇帝たちの恣意的エゴイズムでは決してなかった。むしろ帝國の政治的存立の前提たる巨大な軍隊の維持だった。この軍隊は早くも帝政第二世紀の過程に於て農民が市民軍に代つてその主體を構成するに至っていたが (p. 122ff)、今や益々帝國の政治的社會的經濟的に決定的要素となっていた。しかもこの軍隊を扶養する經濟的能力を帝國の經濟が失ひ始めたその瞬間に、國家は都市ブルジョアジーの經濟生活に對する強制搾取の手段に訴えた。その結果は軍隊を動員して

の官僚制支配力の強化であり、そして都市の荒廢と民衆の恐るべき窮乏化であった。かくて強制國家、ライトウールギー國家への道は堂々と押進められて行った。更にロストフツエフは、以上二つの原因が實はより根源的に《國家的利益の住民に對する至上權》というあの古代國家生活一般に共通の特徴に根ざしているという (p. 36)。

これこそは大衆を犠牲にし彼等から一切の勞働への關心を奪い去り、帝國の經濟生活を内部的に衰亡せしめたのであると。

このロストフツエフの所論に對してはマックス・ウェーバーがある種の親近性を示すと同時に興味深き對立を鋭く形作ってくるのである。

ロストフツエフは、古代文化を沿岸都市文化たる特性に於て觀照し、ローマ帝國の没落をこのポリス的古代文化の滅亡の意味に解している點に於て、しかもその際特に經濟生活への重心的關心を示しつつ、その崩壞の原因を内部發生的 (社會的) 原因に求める點に於て、ウェーバーと一應一致しているものと言ふことが出来る。而もこの類似點はウェーバーの影響を想定せしめる。更に

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の一性格

又ウェーバーは彼の古代社會經濟史研究に於てその詳細な實證的方面については最も多くロストフツエフから學んでいることが明かであり屢々價值ある引用の仕方を見せている。にも拘らずそれらの實體的内容の意味解釋に於て、その觀照の究極的動機、問題意識、方法に於て、その差異の意味する所は頗る大であると思う。

抑々古代のポリス文化なるものは、その建設の初頭から商業利潤への特別な關心に於てなされた點を指摘する傍らウェーバーは、この商業的關心それ自體が政治的性格のものなること、否それどころか、ポリスの完全市民にとつては經濟的利害に觸れないことがその理想とせられていたこと (反貨殖主義的經濟倫理) を指摘して、ロストフツエフが無邪氣に都市を經濟生活の擔い手となすの對して、都市の政治的性格 (homo politicus) を前面に押し出したのであった。又、社會的問題なるものについてみれば、階級的反目憎惡こそ古代滅亡の原因となすロストフツエフにとつては、古代オリエント諸國家が宗教的事であることによつてローマに比してより民衆的であり、従つてより永續的であつたことが教訓するよ

うに、若しも支配者が大衆を善導してその憎悪を解消せしめたならばローマの滅亡は避けられたものと考えられた。即ち社會的問題は經濟生活の内部に孕まれたものでありながら今や外部から經濟生活を脅かすものとして政治的責任に歸せられている。だからアルトハイムはこの見解を封鎖的内部成長論、個人主義的エゴイスト的理論だと非難するのである。所がウェーバーに於ては、社會的原因とは古代經濟の本質的構造それ自身でありその特性の決定要因であつて單なる社會的對立を言うのではなく、むしろ社會的對立それ自體の性格を規定する基盤を問題としているのである。例えば一八九六年の論文「古代文化没落の社會的諸原因」に既に見られる古代文化の特性を規定する諸概念——都市文化、沿岸文化、奴隸文化——は、一九〇八年の「古代農業事情」に於ては、一段と深められた仕方で一層總合的に、即ち古代國家の政治的特質や經濟的特質と不可分離の理論構造に於て認識せられるに至り、このような仕方にて古代資本主義の質的意義を問題とするばかりでなく、そこにまで推進して行つた諸々の社會經濟史的諸力が特別の考察の對象と

なつてゐるのである。従つて又所謂社會的問題、それ自身についてさへも、古典古代に於てたとえばポリス市民の平等性維持をめぐる特殊政治的性格のものとして規定せられて重視せられると共に、ロストフツエフとは異つて、むしろ逆に帝政時代には既にその政治的意義をさえ喪失（歴史の主體的意義を喪失！）せるものとして把握せられてゐると共に、これに代る都市ブルジョアジー對農民の社會的反目というシェーマは前面に出て來てはいないと解せられる（Alertum. S. 189）。これらの基本的見解の對立と關聯して、ロストフツエフにとっては平和こそ資本主義繁榮の決定的前提であり社會的問題（内亂）が内部からこれを破つたが故に資本主義（＝古代文化）が滅びたと考えられたに對して、ウェーバーは正に逆に戦争こそ資本主義發展の動力であり、平和と共にそれは急速に衰退してゆくと主張した（S. 276, 32）。ハドリアン代の擴張政策の停止は、ロストフツエフにとっては單に市場擴大の中止であるにすぎぬが（P. 305）、ウェーバーにとっては古代資本主義の構造的解體への決定的一步を踏み出すものとせられる（S. 22）。というのは、ロストフツ

エフが古代資本主義の頂點に於ける奴隸制の意義を重視しないのに對してウェーバーは、やはり依然として古代經濟（ローマの資本主義）の決定的本質的性格のものとみなしているからである。

さて然しながら、古代經濟生活の觀照に於けるロストフツエフとウェーバーの深刻な對立の根本的意味を明瞭に畫き出さんがためには、《オイコス經濟》をめぐる兩者の對立せる見解を考察するに越したことはない。尤もロストフツエフのオイコス論は極めて單純であるに對してウェーバーのそれは極めて不分明且つ難解であるから、吾々はウェーバーの所論を整理徹底せしめつゝ彼の基本的主張乃至理論を鋭く茲に提示して理解するという作業を行わねばならぬであらうと思う。

ロストフツエフは K. Bücher, G. Salvioni と並べてウェーバーを擧げ、周知の如く古代經濟一般をオイコス經濟となす見解に反對した。所がウェーバーは既にエドゥアルト・マイヤーの批判を承認しつゝ、それを古代一般に當はめるのは誤りであること、オイコス概念は理念型として使用せるものなること、を斷っているのである

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の一性格

から、これはウェーバーに對するロストフツエフの誤解ともなしうであらう。しかしこの誤解は極めて興味深いものがある。先ず差當つてはウェーバーの社會科學方法論に對する無理解、否むしろ拒否の態度を意味するであらうが、ここに人は歴史學派經濟學者と古典古代史家との間のあの古い對立の再現をみる事が出来る⁽²⁴⁾。もちろんウェーバー自身は歴史學派の人々との對決のうち

に周知の學問的形成を行つて行つたのではあるけれども、コルネマン、エドゥアルト・マイヤー、ロストフツエフ等々の如き押しも押されもせぬ古典古代史の大家たちの目に映ずる所では、やはり發展段階説的シエーマに彩られた歴史學派經濟學者として見做されているのである。先ずロストフツエフの把握するオイコス概念は資本

抵抗線が張られているのである⁽²⁵⁾。然しながらこの方法拒否の態度に表現された兩者の對立はより根源的に古代經濟史研究の基本動機乃至問題意識の差異、古代文化による關心の質的差異、の結果である。それがオイコス概念に對する距離感や評價の巨大な差異となつて現れてくる。先ずロストフツエフの把握するオイコス概念は資本

主義の概念と同じく現代的生活意識の親近さに於て觀念せられ、現代でもずっと廣大にオイコス經濟が存するの資本主義が依然衰退しないが、何故古代では更びオイコスの原始形態に負けて了つたのかと問う (p. 483)。從つてオイコス概念はその質的變化を超越せる單純な自給自足の原始的自家經濟という單一の意味以上のなにもでもなく、古代經濟の發展シェーマは Oikos→Kapitalismus→Oikos (O↓K↓O)として單純に規定せられる。古代資本主義が再びオイコス經濟に復歸(逆轉)したと、これがロストフツエフの没落論の經濟史的意味である。この際ロストフツエフは一九・二〇世紀の工業資本主義に接近した段階の古代資本主義はヘレニズム時代の最盛期オリエントに現れたものと解し、技術的にはそれを受容することに於て成立したローマの資本主義的經營はアウグストウスの平和再建並びにフラビアン・アントニー時代に於てヘレニズム時代のそれに接近せる發展を示したとなした。⁽²⁶⁾所がウェーバーに於て古代資本主義の最頂點はむしろローマ共和制末期の擴張戦争とそれにつづく内亂との時期であり (S. 28)、ヘレニズム時

代についてはむしろ國家經濟的要素が私的《資本》形成乃至その活動空間を漸次壓殺して行つた點にこそ特徴づけられ、近代的《資本主義》は頗る制限づきにしか妥當しない點を明確にした (S. 185)。いずれにせよ古代資本主義の典型的且つ最も大規模なる發展は、後に吾々がオイコスとの關聯で述べるような、ギリシャと鋭く對照を形作る所の特殊ローマ的社會經濟史的發展の所産であり又その歸結であつたのである。それ故以下古代資本主義と言ふときローマをもつて代表せしめて差支えないし又必要な考察の方法でもある。

さて、ウェーバーのオイコス概念を「經濟と社會」中のカズイステイツシュな概念規定だけで論ずるならばともかく、古代社會經濟史研究に於ける具體的歴史的生への適用の仕方に於ては、オイコス概念が、種々多様な意味内容のものとして使用せられてゐる點を注意すべきであろう。しかもそのわけは、一口に家族共同體 (Hausgemeinschaft) といふ、家屬經濟 (Oikos-wirtschaft) というも、東はメソポタミヤからエヂプト、イスラエル、西はギリシャ、ローマに於て、それぞれの政治的、社會

經濟的、宗教的、風土地理的等無數の歴史的要因の規定をうけつつ、それが當該地域に有した歴史的意義や發展の方向に多様な且つ巨大な差異が存するからである。即ちオイコスは一方向に於ては、ギリシャ・ローマ古代について言えば、帝政時代の發展の所産であつて、しかも初期中世の封建的經濟への又封建的社會への過渡物という意味のものであるにすぎぬが、他方では（東方に於てもギリシャに於ても）吾々の知りうる歴史の初期に存し、しかも王侯や祭司のオイコスとして……存在した」と述べたウェーバーは、このオイコス經濟が單なる古い家族共同態の擴大自家經濟から自然發生的に成立したのでは決してなく、種々の要因によって規定せられたる優れて組織的（支配關係を前提する）形成體であることを明確に暗示する。しかもこの箇所の續きに於て、主要な點について言えば初期古代と（帝政）末期古代とに於てはオイコス經濟は《實物經濟的》需要充足であるがその中間の古典古代の經濟（＝大奴隸財產制）に於ては、以前の自説を修正しつゝ、《資本主義的》經濟の存在を認めた（S. 104）。所でロストフツエフがその性格検討を

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の一性格

全く回避しているこの古代資本主義についてウェーバーは、一體それが近代資本主義との比較に於てどこまで資本主義と言えるか、どんな特徴のものとして理解すべきかということ、資本利用方法、資本構成内容等について鋭く分析しつゝ検討を行い、《資本主義的》なる概念を社會的メルクマール（自由労働契約）を加えずに考えるならば、即ち純經濟的内容のものとして經營の流通經濟的基礎の存在という點で考へるならば、古代の全時期に於て、しかも就中古典古代にはなによりも資本主義が存在したと見做すべきだ、となした。所でこの場合にも古代資本主義の特質を決定した種々の要因のうち特に(1)貴金屬貯藏、(2)奴隸制（奴隸所有）、(3)古代國家の政治的運命並びにその特質の三契機を決定的に重要視する。古代國家の政治的特質のうち、ウェーバーの「古代農業事情」の全研究の基本的構想に觸れる問題であるが、一方の極にオリエント世界就中エジプトの王の賦役官僚制支配が置かれ、他方の極に古典古代のポリス就中典型的にローマが置かれ、その間の移行諸形態（偏差）としてバビロニア、イスラエル、ギリシャが置かれる。これらの地

中海古代世界のうち、エジプトの純粹型古代國家に於ては就中國、家財政（ \parallel 財寶としての貴金屬貯藏の問題）が私的資本形成を抑壓するあの統制支配的あり方が、殊にオリエントに特有のあの神政體化的宗教意識（ \parallel カリテートの問題）と結合しつゝ、資本主義的營利の擔い手としての奴隸制を排除すると共に私的《資本》形成の一切の源泉の根絶へと志向せられて行つたのに反して、ローマに典型的代表を見出す古代都市國家に於ては、後に觸れるようにあの空前絶後の奴隸制の展開に相應しつゝ、古代資本主義の典型的發展を來したのであって、既に一寸觸れたように、吾々はこの純粹型の由來と性格こそ問題にすべきであるが、ウエーバーもかく考えているとみて誤らぬであらうと思う。さてこのローマに特殊に展開をみた奴隸制大經營（ \parallel 資本主義的經營）をウエーバーは、右に指摘した《實物經濟的》アウタルキーとしての《オイコス》とは違つた意味でオイコスだと言ふのである。即ち《古代の奴隸「大經營」は、分業的及び協業的生產方法に基いて作りあげられたのでなく、一個人の財産中に於ける人間所有の偶然的累積によつて作りあ

げられたものだ。つまり事物的（*gegenständlich*）要請に基いてなされたのでなく、純粹に個人的結合關係に於て（*personlich*）なされたものなのである。これが「オイコス學說の正しい意味である。だからなにかしら一切の大經營なるものは特に不安定なのである」と言う（S. 32）。かくして吾々はウエーバーがエドゥアルト・マイヤーの批判を承認しつゝ、しかもやはり依然として古代經濟にはロード・ベルトゥスの意味に於ける《オイコス》が事實重大な意味をもつていたと強調する意味を稍々理解しうるであらう。古代の初期と末期とがオイコスだ（ロストフツエフ）といふのでなく、恰かもその中間の古代資本主義の典型に於てこそ、その基本的構造と特質とに於てオイコス經濟だといふのである。ともかく吾々は一應ロストフツエフと對比する意味に於て上述の吾々の説明に基き左の如くウエーバーのシエーマを規定して置きたいと思う。《實物經濟的オイコス》 \downarrow 資本主義的奴隸「大經營」（ \parallel オイコス） \downarrow 《グランドヘアシャフト》（ \parallel コロナート制）に於けるオイコス、略記して、 $O \downarrow K$ （ $\parallel O_1$ ） $\downarrow G$ （ $\parallel O_2$ ）である。吾々は以下に於てこのウエー

パーの古代經濟發展のシエーマの意味解釋を、ロストフツエフとの比較を念頭に置きつつ、更に立入って行わねばならぬであろう。

第一、ウエーバーが一八九六年に強調しすぎた奴隷制の問題を一九〇八年に於ても多少の修正づきでなお依然として重視するのは(S. 222)、唯單にそれが生産技術的に種々の障害となつて古代資本主義發展の阻害要因をなしていたが故ばかりでは決してない。むしろ先ず第一に、私經濟的營利資本としての古代資本主義に於ける資本所有の構成要素の中で、(現在の資本主義に於ける固定資本を形造る一切の生産手段を缺如する傍ら)、奴隷所有が筆頭第一に重要な要素をなすからである。そればかりではない。外ならぬこの奴隷制こそは古代資本主義の隆盛と衰亡とに全く歩調を共にしたのであって、その構造的特質を最も典型的に表現するものだからである。これがローマの資本主義的發展に典型的現象であつたことは既に指摘した通りである。先ずこの古代資本主義は生産手段としての奴隷の量に強度に依存したから、奴隷獲得のための擴張征服政策を不可缺に前提した。ウエー

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の一性格

パーが、戰爭資本主義、掠奪資本主義、政治寄生的資本主義、などの概念を用いて表現したのはこの事態に對してである。政治的擴大は流通經濟網を大陸内部へと擴大したが、この流通經濟網の擴大は同時にその稀薄化を齎し、ロストフツエフとは逆に、資本主義的流通經濟の破局へ導く筈であつた。何故か。それは既に指摘したように資本主義のオイコス性格の故であると言へる。奴隷制の存在を本質的中心的構成要素として許容するような性格のオイコス經濟を基底として、その温存維持、否それどころかその強化擴大の基礎前提の上に古代(ローマの)資本主義的發展がなされたが故であると解してよからう。中世に於ては農民の長い間の經濟的生產力的發展が内側から流通の窓と通路を開いて局地的市場と自由分業を形成して行き、やがて農村と都市との相互依存度(分業)を強化しつつ周知の經濟發展に導いて行つたと言ふことが出来るのであるが(S. 203 ff.)、古代に於ては奴隷制を基底とするオイコスの自給自足的經濟を前提し、そこでの奴隷所有の量的偶然的集積に専ら依存する不安定なる分業による餘剩産物が市場に向けられて

ゆくのであるから、流通經濟網の擴大（政治的擴大）↓
 オイコス經濟單位の奴隸制大經營の擴大↓市場購買力の
 必然的縮小化、という理論構造をとらざるを得ない譯で
 ある。それは内陸地帯への擴大、交通輸送力の絶對的限
 界、と相俟って、内陸地帯に於けるオイコスの經濟を生
 成せしめ且つこれは内側から購買力に絶對的制限をつ
 り出すことを意味せざるを得ない譯である。だから吾々
 は次のように明確に言い切つて誤らぬであらう。既に指
 摘したようにウェーバーに於ては、平和が（即ち政治
 的擴大の停止が）古代資本主義の衰退に作用したに止ま
 らない。擴大それ自體も亦結局資本主義のより根源的解
 體要因を自らのうちに作り出したのであると。いかんと
 なれば、ウェーバーの所論を徹底せしめて吾々が明確に
 表現するならば、古代資本主義の發展はかゝるオイコス
 の正常な解體の上に成立したものではなく、既に注意し
 たように、オイコスの古代的（特殊ローマ的）支配構造
 の溫存強化の前提の上に成立したのであったが故に、そ
 して經濟的生産力の内部的擴充發展の缺如にも拘らず政
 治的擴大（流通經濟網の擴大、奴隸制の擴大）を要求

したのであったが故に、この擴大は古代資本主義の脆弱
 性、その構造的矛盾、の暴露或はその擴大を意味する外
 はなかったと解せられるからである。ここで更に吾々は
 後に觸れる吾々の解釋に關聯して言つて置けば、むしろ
 この古代資本主義の徹底的解體作業こそは、あの古典古
 代文化一切の基本的前提たる、従つて然り正にこの資本
 主義發展にとつても基本的前提たる、都市共同體とその
 一切の支配機構との決定的解體の行程と運命を共にしつ
 つ（従つて、オイコス經濟の古典古代的基礎條件を解體
 せしめつゝ）、古代經濟生活がその内部から全く新しい
 自生的に健全な發展の途につきうる諸前提をつくり出し
 たのであると。この問題はいまいちど最後に觸れねばな
 るまいが、その前に片づけて置かねばならぬ肝要な問題
 がある。それは當然生起せねばならぬ重大な社會經濟史
 的設問でなければならぬ。何故外ならぬローマにのみ、
 このようなオイコス經濟的奴隸制を基盤とする古代の典
 型的資本主義が發展したのであるか？ これはローマに
 特有な共同體⁽²⁹⁾の形成の問題と關聯づけて理解することが
 出来る。次にこの點に觸れよう。

第二、ローマの擴張時代に於て大土地所有の擴張が止まる所を知らざる前進をつづけたばかりでなく、強大な奴隸制を基盤とする資本主義的經營にまでも發展し得た理由は、抑々ローマの gens が國家權力の干渉を排除し得る特殊神聖化された Hausrecht を根幹として鞏固な共同體を形成したことに存する。氏族は curiae の公的聖所と異なる所の私的家用聖所を共有する。ここから大家族團體の法的支配組織は神聖化せられる。この法意識、宗教意識を媒介として強力に結合せられる gens の共同體の國家的形成の特徴こそはギリシャのポリスに缺如する決定的相違點なのである。家族團體のこの權威的組織はローマ國家體制の全歴史に封建的構成要素を與えたものであり、この點から又この點に關聯してのみ、あのローマに固有の ciens 的結合の形成、その獨得の歴史的に重大な役割を理解することが出来るのである。

さてローマの擴張時代の土地擴張に於ける土地占有は、重裝歩兵の擔い手として登場し來り當然のことながら ager privatus に關心をもつ Plebs と ager publicus の占有に關心をもつ所有者階級との對立を生み出す

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の一性格

つ、結局の所 Plebs 階級の没落、その經濟的並びに社會的意義の喪失と、奴隸所有者階級の政治的經濟的主導權の把握に歸結した。この過程がローマの都市共同體に於けるプレブスとゲインス（都市貴族）との對立、前者のコミティアに於ける擡頭と又その衰退という周知の歴史的發展なのである。この所有者階級は勿論先ず官職貴族を代表する所の gens であるが、同時に bundesgenossische Possessoren としつ publicani をその中から出した Equites なる社會層に屬する者である。前者はイタリアの大土地所有として、後者は《海外的資本主義的擴張》の擔い手として屬州の大土地所有者となり、いづれにせよ購入奴隸制の侵入の後に嘗てみざる大規模の農業資本主義を創造した（S. 233）。さて吾々が茲で特に指摘すべき點は、右の大土地所有の發展（土地擴張）は貴族（gens）の個人主義的所有概念のシムボルたる Einzellhof（= villa）の勝利、古き村落並びに ager communis の破壊、都市共同體と都市法の勝利を意味した。それは他面、一切の共同耕作的要素の徹底的粉砕を志向する法（Bodenrecht）の絶體に傾向的な發展の過程に照

應するが、具體的には、吾々が指摘した gens に於ける家長 (Dominus) の無制限なる支配關係を土地占有に移したことを意味する (S. 229)。かくして吾々は、ローマの大土地所有の強大なる發展が gens 共同體を中核とするローマ都市共同體の特有なる性格に由來することを知らるのであるが、更にこの大土地所有の奴隸制による資本主義的經營に於ては、同じくギリシャに缺如する所のローマ的なるクリエンスの結合の支配構造が、私法、家法の神聖化に基幹をもつ gens の都市共同體のいま一つの基礎構造として計り知れぬ歴史的役割を演じたという點を指摘すべきと思う。⁽³⁰⁾つまりゲインズ共同體にもとづくクリエンスの結合關係の存在の故に、不在地主としての都市共同體員たる資本主義的大土地所有者の存立の基礎前提はゆるぎなく維持せられていふことが出来る。この支配關係を經濟的側面から言えば、都市共同體員を神聖なる家長と仰ぐ所の家屬經濟 (大家計) であるのだが、逆にこのオイコスの實體的基礎が上述し來った共同體に特有のクリエンスの支配機構なのである。それ故、既に引用した所の、古代資本主義を personlich た

る經營の性格故にオイコスだとウェーバーの言う意味は、單に近代經濟の「即事象的」に對比せられる分業の「個人的」性格という意味のものだけでなく、この《personlich》を、上述し來つたローマ共同體のクリエンス的基本組織構造をあらわすものとして理解せねばならぬと思うのである。同時に「だからなにかしら不安定なのだ」とウェーバーの言う意味は、社會的な面からすれば一應法的に權威づけられた支配關係として相對的に合理的であり鞏固であるが、近代的な支配 (legale Herrschaft) に比すればやはり《sachlich》でなく《personlich》であり従つて非合理的である。また、經濟的な側面から言えば、そのような非合理的支配構造をもつオイコス經濟の分業は、家計と經營の不可分離の結合に於て成立するが故に非合理的性格のものであり、従つて不安定なのである。

第三、以上の考察に基いて吾々は再び既に提示したウェーバーのシェーマ、 $O \downarrow K (\parallel O_1) \downarrow G (\parallel O_2)$ の積極的解釋に移らうと思う。一體 O 、 O_1 、 O_2 の間にどんな關係があるものと理解すべきか、それは同質のオイコス

なのか、それとも何か質的變化、發展の契機を認めうべきか、という問題である。既に指摘したようにウェーバーは一方ではオイコスがギリシャ、ローマでは（即ち西洋古典古代的發展に於ては）《帝政時代の發展の産物》だと言ひこの帝政末期に於ては、グランドヘアシアフト（||コロナート制）も、國家經濟も《オイコス經濟》になつたといふのであるが、他方では古代の初期から存すること、そして又古代の最盛期に於て存在した資本主義がオイコス經濟だといふからである。而もこれらのオイコス概念相互の差異という點については特別な概念規定を行つていないから、一見同一のものと解釋せられ易く、又一般にウェーバー解釋に於ても《オイコス》↓（近代的）《經營》の際立つた發展の二段階的シェーマが強調せられるのであるから、それだけにこのオイコス一般を一種停滞的、無發展的な《前近代的》概念、一般として漠然たる指定が行われ易いと思ふ。確かにウェーバーに於てこの對照が鋭く前面に押し出されてゐるように印象づけられることは、特に「經濟と社會」に於て、例えばその中でオイコス論を展開してゐる所に於て明確であると

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の二性格

思ふ。しかしそのことはオイコスの内部に於ける質的な相違や發展の存することを無視してよいといふことにはならない。もとよりオイコス概念は、グランドヘアシアフト概念と同じく、古代から中世の全時期を通じて事實行われているように使用せられてゐるのであるから、その共通の基本的メルクマールは存せねばならぬ。オイコスについて言えば、それは《資本主義的貨幣所得をでなく主人の需要を組織的に實物によって満たすことを究極の指導因とする所の一人の君主、地主、都市貴族が權威的に行う大家計》であつて、單純な家族共同態の自家生産とは同一ではない。しかしながらこの基線は必ずしも純粹型として常に維持せられる譯のものでもないし、又オイコスの組織的形成を根底に於て規整する諸契機（勿論これにはウェーバーの「古代農業事情」が取扱つてゐる諸領域に於てすべて全く異なる所の宗教的或は法的意識形態から政治構造、共同體、生産力、風土的條件等々多數を含む）の頗る巨大な差異によってオイコスの質的意義は全く別様でありうる。否むしろこのオイコス經濟の質的意義の相違とそこから歸結されてゆくその後の發

展の差異こそは、就中古代經濟史研究の根本的に重要な問題であると言わねばなるまい。吾々は今この小論に於てウェーバーのその點に於ける成果を詳細に論ずる暇は勿論ないが、今右のシェーマのうち、 $O \rightarrow K$ ($\parallel O_1$) に於て、 O をウェーバーの扱ふ全オリエント古代を含めての全古代經濟發展のシェーマという意味に於ける諸領域間のオイコスの質的意義の相違ということ、又それらが相互に如何に影響したかという點を一應度外視して、問題をローマ史の典型的發展の内部で考えれば、既に稍と立入って論じたように O と O_1 の間には質的變化はなく、*Oscis* 共同體の特有な形成に應じてローマ的なオイコスの組織構造が漸次強化擴大せられて遂に奴隸制を生産力とする段階に必然的に到達したものとなしうる。即ち既に論じた如くローマのクリエンス的結合組織を基底とするオイコスは、その性格の故にこそ、後の大奴隸制に必然的に發展し得たのであって、兩者の質的差異はないものとみる譯である。所が K ($\parallel O_1$) \downarrow G ($\parallel O_2$) に於ける局面に於ては、ウェーバーが《帝政時代の(歴史的)發展の所産》であるという O_2 を、吾々は古代のオイコス

經濟よりも一段と高い生産力的發展の段階に(少くとも內的諸條件を含めて)達したものと理解すべきものと思ふ。このローマ帝政末期史の質的により高いオイコス經濟の發展のみが、後の古典的莊園(\parallel オイコス)への經濟發展に連る。前提乃至前段階となったものである。ウェーバーは「經濟と社會」の中でオイコス發展の二類型を提示し、(1) *Oikos* \rightarrow *patrimoniale Herrschaft* (2) *Oikos* \downarrow (近代的) "Betrieb" を擧げていたのであるが、この後者の發展に連るのは、西洋古代末期のオイコスのみであつて、ギリシャをも條件づきで含みつつ特にオリエントのオイコス經濟は前者の類型のものと考えられていると言つてよい。そこで今ロストフツエフの單純な没落のシェーマに對比するとウェーバーに於ては、資本主義の没落(下降線)に對してオイコスの質的發展(上昇線)が對應していると言ふことが出来る。更にこの古代末期のオイコスが正常の發展をとげた所では中世の經濟發展を経て近代的經營、近代資本主義の成立にまで連るのである。勿論敢て注意する迄もなくこの發展が單純なる連續ではあり得ない。むしろ問題は次の點に存すると

言うべきである。吾々が理解し明確に提示するように、若しも古代末期のオイコス經濟なるものが凡そ古代世界の（従つて又古典的ローマの典型的發展を含む）オイコス經濟一般とは質的に異つた何か新しい生産力的發展段階のオイコスに移行したのであるとすれば、そして又その中からのみ、勿論種々の歴史的契機の合體の中に於て、中世封建社會への古典的形が行われて行つたとするならば、これらの言わば典型的經濟發展をそれ以外のオリエントのオイコス經濟の全く異つた歸結に對比する時に、吾々はそのような發展過程を優れて歴史的に個體的なる經濟發展のそれとしてその社會經濟史的決定要因を鋭く問わざるを得ないからである。何故恰かもそのようなオイコスがローマ帝政末期の而も没落期に於て現れたのであろうか、何故その中から特にガリアの古典的形がなされて行つたのに對して、例えばアフリカの大グランドヘアシャフトはその封建社會への發展を停止したのであろうか、總じてこれがゲルマン民族との種々の文化關聯をも含め封建制成立をめぐる最も重要な社會經濟史的設問に外ならぬ。ウエーバーはこれについて内容的に

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の一性格

は何も立入っていない。唯僅かに古代の反貨殖的經濟倫理の問題性を指摘する傍ら(283ウ)、キリスト教がこの發展といかに歩調を合せたかという點を暗示するに留めた。この古典古代世界に特徴的な經濟倫理を勝利に輝くキリスト教が古代末期史の中で如何に新しいそれに切りかえてゆくかという問題は、ウエーバーの問題意識の根本に連ると共にロストフツエフには全く缺如せるものである。ロストフツエフがウエーバーのオイコス論に對して無理解を示す理由は、ウエーバーが重視する所のオイコス經濟の內的質的差異やその意義を一切無視すること、この質的差異やオイコスの質的變化に決定的に作用し來る所の種々の基本的契機、例えば特に共同體の形成並びに崩壞の諸發展、それに密接に關聯する法的あるいは宗教的意識諸形態、經濟倫理の問題等についての問題意識並びに方法的諸概念を一切缺如するからである。この問題意識は、ウエーバーの場合、ヨーロッパ近代社會就中資本主義の具體的個體的認識から發する普遍的的問題意識に直接動機づけられてるのであるが、差當り「古代農業事情」の極めて直接の意圖並びにその研究

成果は、第一には近代資本主義との比較に於ける古代資本主義の質的意義あるいはその特性検討を行い、且つそのようなものへと推進して行き且つかかる特性を刻印づけるに至った歴史的諸条件のうち特に社會經濟史的側面を究明し理解することに存した。そして第二に、この古代資本主義の崩壊の過程に於てオイコス經濟のあの西洋古代に特殊な質的に新しい發展への道を展望して、後の西洋經濟發展の全過程との《連續性》の端所を把握するということに存したと言えるであろう。つまり古代文化（古代資本主義並びにその基底たる都市共同體）の没落と古代より中世への經濟發展の連續性とが同時に究明せられたと言えるであろう。そしてロストフツエフと對照的に特殊近代資本主義文化の個性的認識に發する照射によって古代文化に對する一定の距離感が維持せられ、これによって却って冷靜な即事象的な古代文化の客觀化が極めて生産的な形で行い得たものとなしうるのである。

これに反してロストフツエフの場合には、滅亡してゆく古代文化、特に資本主義的都市ブルジョアジーの經濟生活の輝きへの愛惜と、それが被壓迫農民大衆の野蠻に

して殘忍な復讐と破壊の行爲によって陷穽せられ没落してゆく悲劇的運命への限らない重壓感とが存するのであって、ここではロストフツエフが直接體驗した現代歴史への抵抗意識がそのまゝの親近さに於て反映せられていると言える。そしてこの悲劇への共感力の強さが、彼の卓絶した研究能力と偉大な敘述能力とに結合しつゝ、その帝政社會經濟史の敘述を一種の限りなく美しい生々として律動的なる歴史物語たらしめたのであった。ここでは第三世紀の歴史的過程は、アルトハイムの如く軍事的・政治的並びに精神的・文化的の再建と新創造の時代としてではなく、又コルネマンの如く新しいヨーロッパ的國家形成へと導く歴史的意義を擔うこともなく、そして吾々が論じたようにウェーバーの如く新しい經濟的基礎の再建過程としてでもなくして、要するにこれら一切の創造的契機を含有する所の時代としてではなくして、唯單に第三世紀の動亂はこの經濟生活を外部から脅かし續けて來た所の歴史に於ける暗い運命の層以外のものではなくあり得なかつたのである。かくて帝政末期は窮乏化と野蠻化、破壊と滅亡の暗黒面消極面からのみ觀照せられ

て、深い哀感を漂わせる所の歴史敘述となった。これがロストフツエフのローマ帝國没落論である。

言うまでもなくロストフツエフの「ローマ帝國社會經濟史」は多くの優れた研究成果を含んだ最初の最も大きなローマ社會經濟史であるが、そのうち方法的に特に最大の功績となすべき點は、ローマ帝國の經濟生活を種種に彩った社會階級構成について特別なる分析を行ったという事であると思う。社會的諸階級の複雑な構成を明確にしその變化發展を豊かに敘述した點にあると思う。所がこれらの社會層の形成がそして又崩壊がどのような歷史的諸條件の下に行われたのか、という點については、唯單に都市化が二階級を創り出した、というような一般的表見的解答しか與えられておらず、政治的運命や經濟的組織構造、法的並びに宗教的意識作用や共同體的存立との關係等々多數の社會經濟史的に重要な方法的諸契機との内的構造關聯は一切問題とせられていないのは一つの重大な缺陷であると言わねばなるまい。たとえば共和制末期に於ける元老院階級が帝政初期に於ては漸次都市ブルジョアジーによって代つて了つた點、階級の内容が

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の一性格

變化したことを切角指摘しているのに、この變化は古い階級共同體の基礎とどのような關係に立つのか、新しい元老院階級と舊いそれとの間にはこの基本的な點に於て斷絶があるのか連續があるのか、と言つた問題は當然のことながら掘り下げられてはいないと思う。即ち階級の種々の相が畫かれているが、それらの社會層が例えばどのような共同體に規定せられて形成され又崩壊したかの問題、即ち soziale Schichtung (階層形成) の問題は取扱われていない譯である。それ故ロストフツエフの豊かな研究成果を手引きにしつゝウェーバーが提起するそれらの問題や方法概念に導かれて、古代史の諸領域、並びに古代末期から中世世界の成立にまで至る一層總合的内容的研究を行うことが今後學界に残された課題と言へるのではなからうか。

- (1) Lactantius: *Divinae Institutiones* VII, 15. (註⑧ ウォールメンツの引用による)
- (2) Tacitus: *Germania* c. 33
- (3) Augustinus: *De Civitate Dei*.
- (4) Machiavelli: *Discorsi sopra la prima deca di Tito Livio* 並ぶと F. Meinecke: *Die Idee der Staatsräson*

in der neueren Geschichehte 第一章の「キヤメリ」の項
参照。

- (5) Voltaire: Essai sur les mœurs et l'esprit des nations. 1740.
- (6) Montesquieu: Considérations sur la grandeur et la décadence des Romains. 1734.
- (7) Edward Gibbon: The decline and fall of the Roman Empire. 1776 ff.
- (8) F. W. Walbank: The decline of the Roman Empire. 1946, p. 1 ff.
- (9) Ernst Kornemann: Das Problem des Niedergangs der alten Welt, Gestalten und Reiche. S. 339 f.
- (10) ウェーバーの古代没落論にとって最重要な文献は「Agrarverhältnisse im Altertum」, 1908. (Gesammelte Aufsätze zur sozial- und wirtschaftsgeschichte. S. 1—288)——以下引用は「Altertum」とす——である。彼の有名な論文「Die sozialen Gründe des Untergangs der alten Kultur」, 1896 は初期ウェーバーの思想を知る上に重要ではあるが、多くの點で前者によって修正せられねばならぬ故、補足的にのみ考慮すべきである。この外「Wirtschaft und Gesellschaft」中の多くの箇所、並びに「Religionssoziologie. 3Bde, 1920」を彼の古代觀察に利用し得た理由は存在しない。
- (11) M. Rostovtzeff: A social and economic history

of the Roman Empire. 1926 の著の獨譯 Gesellschaft und Wirtschaft im römischen Kaiserreich. übersetzt von L. Wickert 1929 は主として註に於てその後の多くの文献を加へ部分的に新しくされたが本文の主張には殆んど變更されてなきこと序文に述べられている通りである。ここでは主として英語版による。なお一九三五年に伊語譯が出たが筆者未見である。

- (12) E. Kornemann: Weltgeschichte des Mittelmeerraumes. Von Philipp II von Makedonien bis Muhammed. 2Bde. 1948 因みにこれについての一端は社會經濟史學一九五五年第二號に取扱つたのをみられたい。
- (13) F. Altheim: Niedergang der alten Welt. 2Bde. 1952 これは Derselbe: Die Soldatenkaiser. 1939, Die Krise der Alten Welt im 3. Jahrh., Bd. I u. III 1943 の改訂増補新版である。因みにアルトハイムの没落論については拙論「アルトハイムの古代没落論に於ける歴史觀をめぐって」としていずれ發表するのをみられたい。
- (14) 歴史學派經濟學者たちに對するウェーバーの方法論的對決の跡を辿ることは、彼の社會經濟史方法のユニークな形成を知る上に不可缺である。Max Weber: Wissenschaftslehre の前半クニース、ロツシャイ、シエモラー批判並びに「客觀性」などの諸論文が讀まらるべきである。
- (15) ウェーバーの宗教社會學研究、即ち「Die Wirtschaftsethik der Weltreligionen」(1913—1919) は、決して

單なる社會學ではないこと、むしろ卓絶した意味での宗教史であり、宗教史を社會史へと方法的に擴大した新しい宗教史として理解すべきこと、については拙著に於て既に論じた。關根正雄・内田芳明著「舊約宗教の社會學的背景」(新教出版社)第一論文序説をみよ。

- (16) Oswald Spengler: Der Untergang des Abendlandes. 2Bde 1918 ff., A. J. Toynbee: A Study in History. 6Vols 1934 ff.
- (17) この問題は増田四郎「古ゲルマン文化連続性の問題」「フランク王國の商業交易」(いずれも「ドイツ中世史の研究」中に所収)並びに「古代より中世への轉換の問題」(經濟研究一九五二・一〇)その他既に明晰に究明せられたるは周知の事に屬する。
- (18) Otto Seeck: Geschichte des Untergangs der antiken Welt. 5Bde 1922. E. Stein: Geschichte des spätrömischen Reich I, 1928. T. Frank: A History of Rome 1922. G. Ferrero: La ruine de la civilisation antique 1921. W. E. Heitland: The Roman fate, an essay in interpretation 1922. E. Stein: Vom Altertum zum Mittelalter, Vierteljah. f. W. G. 16 (1922). Vassiliev: The problem of the fall of the western Roman Empire and the ancient civilization, 1921. E. Kornemann: Das Problem des Untergangs der antiken Welt (Vergangenheit u. Gegenwart 12) 1922. Kahrstedt: Der Zusammenbruch

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の性格

des antiken Staatensystem (Verg. u. Gegenw. 14) 1924. Rostovtzeff: The decay of the ancient world and its economic explanations (Econom. H. R. 1929—30). Gray, W. D.: The Roman depression and our own. (Clas. Journ. 1934). Westermann, W. L.: The economic basis of the decline of ancient culture (Amer. H. R. 1915). T. Frank: Race mixture in the Roman Empire (Amer. H. R. 1926). Schubart, W.: Vom Altertum zur Mittelalter. Das Kontinuitätsproblem (Arch. f. Kulturgeschichte 1926).

- (19) F. Altheim, a. a. O., I. S. 2.
- (20) Rostovtzeff: Social and Economic History of the Hellenistic World 3 vols. 1941s, p. 1303 f 並びに Same: Roman Empire p. 1.
- (21) Altheim: a. a. O., II. S. 34 ff.
- (22) Weber: »Altertum« S. 4 ff, 26 ff, 31 f などの理論的説明を参照。
- (23) Rostovtzeff: ibid. P. 302, 482, 582.
- (24) この論争は上原尊祿「歴史派經濟學派の古代經濟史研究」なる明解な一文をみよ。(ドイツ近代歴史學研究」所収)
- (25) コーヒーに對するホルネマンの評価をみよ。Kornemann: Staat und Wirtschaft im Altertum, Gestalten und Reiche S. 117.

一橋論叢 第三十三卷 第一號

(26) Rostovtzeff: Roman Empire, p. 3, Gesellschaft und Wirtschaft, I, S. 3, Hellenistic world, P. 1303. **ΚΟΙΝΩΝΙΑ** commercial capitalism, industrial capitalism などの概念を厳密に使用していないが、獨譯の註 (I, S. 239) に於て、資本主義という概念を「營利を追求する經濟形態」という廣い意味で使用していること、近代資本主義とは全く異なるものなること、を明瞭に斷るに至つた。

(27) 古代ローマの發展が古代資本主義の「典型」或は「純粹型」であるという概念用語はウェーバーが使用しているのではなく、後に明かにするように、吾々が分析によつてかくウェーバーの所論を明確にした概念である。

(28) 「古代農業事情」の第二部の長大な敘述はこれらの差異に着目してそれぞれの文化領域の經濟發展の特性と、そして又漸移的影響關聯に於ける古代世界の經濟的發展とが鋭く比較究明せられるが、それらの全般的比較考察は到底この小論で取扱い得ぬ故他日に期することとした。

(29) 共同体 (Gemeinde) については直接増田四郎教授によつて中世の《村落共同体》の問題として、しかも特に意識との關聯に於てかねがね注意を喚起せられていたのであるが、更に大塚久雄教授は上掲拙著に對する感銘深き鋭い批判に於てこの問題の提示をされるに及び、「思想」岩波書店29年9月號書評参照)、次いで増田教授は「中世村落研究の問題點」(國學院大學政經論叢29年11月號、但し

教授の御好意で原稿拜讀による) に於て「共同体」の實體を把握するにあらざれば「社會層」のみでは正しい解決が與えられざる事が指摘された。それらの御教示によつて、この拙論では共同体の問題を鋭く掘下げる事が出来たと言つても過言でない、その點厚く茲に感謝の意を表したいと思ふ。

さて、私は拙著に於てウェーバー「宗教社會學」に於ける「社會層」(soziale Schichten) の方法的機能を前面に押し出し、且つ之れを、社會經濟史をも含む宗教史(II) ウェーバーの宗教社會學) の新しい方法概念として強調した際、「共同体」の問題、ウェーバーに即して一層包括的に言えば「社會層形成」(soziale Schichtung) の問題、への關聯づけを行わなかつたことは確かだ不備な點であつた。この點は御教示に従い他日の課題に譲る。ただ、ウェーバーの宗教社會學研究を例えば「古代農業事情」の如きと比較するならば、後者には殆んど前面に現れておらず、之れに反して前者に事實重大な意義を帯びて現れてくる「社會層」を、吾々がなしたように、先ず方法的に鋭く取りあげねばならぬと思ふ。況してウェーバーの宗教社會學の如き、考察の中心的對象が宗教であるというに止まらず、廣く隣接諸領域との構造關聯、因果關聯が始めより明かなる自覺の下に取上げられてゐる一個の總合的科學に於ては、これを方法的に考察せんとする以上は、それらの複雑した諸契機の關聯づけをいかに方法的に處理するかの形式的な方法

的諸前提を明確にしその新しき意義を強調せんとするのは基本的研究態度でなければならぬ。しかし形式的側面を取あげた結果、「社會層形成」の問題も僅かに「社會史的位階づけがなされる」云云（拙著二七、七八頁）と一言總括的に言ったのみで「社會層形成」に於いて問題となるべき種々の方法諸概念、——例えば大塚教授も言われるように共同體や神義論もその一つである——を立入って取あげ得ぬ結果となった。

(30) ローマのクリエンテラ (clientela) なるものは、既に擴張時代に於て、例えばプレプスの重裝歩兵としての擡頭や購入奴隷の流入、秀細小作人等々の要素によつて、昔の軍事的・經濟的意義を喪失したにも拘らず、後期共和制時代には、こんどは官職貴族のあの上比類ない權力形成の基礎として、絶大な歴史的意義を擔つて登場したことは、ウエーバーが明確に言っている通りである (S. 206f)。吾々としては更に一步を進めて、ゲインズ共同體形成にみられるような、特殊ローマ的傳統に深く結合しそこに遡源するクリエンズの結合關係とこの強固な觀念構造が、資本主義的大奴隷經營 (「オイコス」) の、實體的並びに觀念的の、基礎構造として重視されねばなるまい、というのである。つまり、所有者階級の土地擴張それ自身についてはか

古代文化没落論をめぐる社會經濟史的問題の一性格

りでなく、獲得した土地の大經營についても、要するにローマの農業資本主義的發展は、かくの如く、ゲインズ共同體並びにクリエンテラに表現される特殊ローマ的意識形態乃至ローマ精神に根源的に特徴づけられている、と言えらるであらう。

(31) Weber: Wirtschaft und Gesellschaft s. 212 など S. 189 にはオイコスの純粹型として『純粹に自家經濟を行うグルンドヘアシャフトの或は諸侯の家權』と規定せられている。その他 S. 54, 69, などを参照。

(32) a. a. O. S. 215

(33) 但し「經濟倫理」という後の宗教社會學に於ける主要概念の一つたる言葉を「古代農業事情」ではウエーバーは全然使用してはいない。

(34) 古代・中世の經濟發展の連續性的問題は、封建制成立史の主要内容の一つを形作るものであるが、茲では一方でゲルマン民族の氏族定住、土地占有がローマのコロナート制 (オイコス) の展開過程との接觸に於てどのような反響をまき起すかの問題が存する傍ら、ローマ側からみれば、キリスト教の問題でもあり、之れは優れて「經濟倫理」の問題として設定されうるし、又されねばならぬ。

(一橋大學特別研究生)